

まごころだより

2021年 3月号

1年に及ぶコロナの影響に更に追い打ちをかける様に、今年に入ってから35年以來の雪による悪天候が幾日かあって、町中の交通網が大混乱に陥りました。スーパーマーケットの店頭には品薄になる商品もありました。雪はもう懲り懲りと思った人は少なくなかったと思います。そんな状況の中で、まごころを利用しておられた方の訃報を短期間に何人か知ったことに衝撃を受けました。コロナ禍のこともあり、新聞のお悔やみ欄は式の終了の内容で、多くが家族葬でおくられたようでした。ご家族にお話を伺うこともできなかつたのが残念でなりません。病気がもとで利用を中止された方がほとんどですが、お元気だった時のことが思い出され、何かもつとして上げられた事があつたのではないかと振り返りますが、具体的にそれが何かは分からないでいます。

最期は医療機関で逝かれた方がおられたと思いますが、中には在宅での方もいらっしゃいました。後にご家族にお話を伺えることができましたが、本人はお家で過ごすことを強く望んでおられ、入院すると家族に会うことができなくなるし寂しいから入院は嫌だと言われていたようです。ご家族も同じ思いだったようです。遠方に住んでいるために会えるのが年に数回帰省する時だけで、親が長い間一人で暮らしをしていることを何時も気に掛けておられました。ご家族はその病気は治ることがないので、少しでも親と一緒に暮らすことを望まれました。勿論、家庭の理解があつてのことです。実家には姉妹が交代しながら帰省して、親の介護をされておられました。それはコロナの影響だけで起こされた行動でなく、親が子を思う気持ちと同じように、子が親を気使う強い愛情の深さだと思います。

在宅の介護は日中、夜を問わず付き添いが必要です。歩ける方は身体を緩和す

るために、座っている体位を変えようとしたり、トイレに行こうとして立ち上がりとうします。その時にバランスを崩して脱落や転倒の危険が発生します。また寝たきり状態の方も同じ体位は辛いことです。自分で寝返りできる方もいればそうでない方もおられます。誰でもじっとしているのは我慢できません。介護者はそれを考慮して体の位置を変えてあげることが必要です。色々な状態の人がいるので、その方に合わせた介護が必要です。それは昼も夜も問いませんから介護をする人は多くの負担を強いられます。あまり自分で抱え込んでしまうと、自身の健康を損なってしまいます。家族の負担を少しでも軽減するためにデイサービスやショートステイなど幾つものサービス支援があります。担当ケアマネと協力して、その人にふさわしい支援を受けてもらいたいと思います。

